

Title	塩山豊蔵氏を悼む
Sub Title	
Author	阿部, 隆一 (Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1977
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.14 (1977.) ,p.352- 356
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助先生退職記念論集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000014-0352

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

塩山豊蔵氏を悼む

本文庫賛助員会運営委員長塩山豊蔵氏は昭和五十二年十一月三十日急性肺炎にて逝去された。享年八十四歳。氏は明治二十六年十月五日京都に生まれ、慶應義塾大学に学び、在学中特に小泉信三先生に師事し、大正五年理財科を卒業、直に洋紙問屋の老舗たる合名会社中井商店に入社された。当時大学卒業生が個人商店に入る如きは極めて異例であつた。氏は心中秘かに期する所があつたのであろう。爾来同社の中堅社員として活躍し、昭和十一年取締役に進み、戦後戦時中の統制と戦災の打撃によつて開店休業の状態にあつた同社再建の責任を双肩に担つて昭和廿二年専務取締役に任ぜられ、ついで同廿四年取締役社長に就任、中井株式会社として名実共に業界第一の商社に躍進せしめて、四十三年取締役会長となり、四十五年同社は富士洋紙店と合併、社名を「日本紙パルプ商事株式会社」と改めて新発足し、引き続き同社取締役会長の職にあり、五十年会長を辞して相談役に退かれた。氏は六十年間始終洋紙販売業に一貫された。この六十年間は我が国が明治以来先人の辛苦の結果国内の洋紙の需要を漸く国産品を以て賄える一歩を踏み出しながら、上質紙や特殊紙は依然として輸入品に立ちうちできず、全面的な国産品の研究生産を目指して悪戦苦闘をくり返しながら、昭和初頭終に輸入品の駆逐に成功して生産販売に大躍進を見るに至り、それが一転して戦争によつて壊滅的打撃を受けた焦土からの驚異的な復興という波瀾万丈の洋紙商工業史である。氏はこの半世紀以上を常にその第一線に立つて活躍し、その会社を紙専門の商社としては世界第一たらしめ、その間全国業界の各種団体の理事長等を歴任して斯業の第一人者たる指導的役割を果された。同社の社史たる「百三十年史」によれば、

氏の功績は所謂お店式の商店を率先してその近代化をいち早く促進したこと、会社の経営方針は「高く買って安く売り、資本を蓄積せよ」、社員に対しては「商人になれ」と屢言されたという。氏のこの信念は生産部門と流通部門との接点に立つ販売商社の立場の核心をついた金言である。この信条を八十有余年の生涯をかけて貫徹垂範された氏の赫々たる功業については、門外漢の私が喋々するのは贅語と言うべきであろう。

氏が我が慶應義塾を深く愛され、塾の発展の為にその後援には何事によらず文字通り骨身を惜しまず率先尽力された数々の事績は慶應義塾社中周知のことである。我が斯道文庫が昭和三十三年の百年祭の春に麻生太賀吉氏から寄贈され、三年間の準備期間において附属研究所として発足したのは三十五年臘月であった。研究所として出発したが、予算面では人件費と僅かな事務管理費があるのみで、図書・出張・出版等の研究費に至っては極めて貧弱で、積極的研究活動は到底望み得るものではなかった。此は当時の塾の財政上如何ともなし得なかった事情によるもので、積極的な研究事業費は寄附金等の援助を仰ぐ方針で、文庫規程にも「斯道文庫賛助員会」の項目を当初から設けてあった。しかし援助金を募集するには、先ず文庫が他に援助を仰ぐに足る研究実績を出し、その研究事業計画の実行が軌道に乗って確実な見通しを得るまで、即ち文庫が他に援助を仰ぎ得る資格を客観的にも認められるように自ら努力することが先決であると考え、それを三年として私共は励んだ。三年後の三十九年正月塾員の有志に募金の委員をお願いして賛助員会が発足し、第一回の委員会に於て委員長を委員中の長老たる氏を煩わしたき旨が満場一致で決し、幸に御快諾を頂いた。

当時私共としては賛助金の目標を年間二百万円、五年間一千万円はどうしても欲しいと考えた。その頃塾内では各方面が寄附金募集に乗り出しており、当局はその競合の調整に苦勞し、この文庫の募金には個人のみならず、会社関係にも働きかけねばならず、経済産業労働問題の調査研究ならまだしも、営利業務とは全く縁もゆかりもない、古典

研究に果して会社関係が金を出すか否か、私共の目標額は全く夢物語だというのが大方の批評であった。私は氏に求めにかかつて文庫の現状と研究計画を詳細に陳述して懇請した。氏は黙って聞かれ、最後に目標額のみを確められ、淡々として静かに、「むづかしい学問上のことはよくわかりませんが、学問の中でも一番大切な基礎となる一番金のかゝることをなさろうとしていることはよくわかりました。大切なことですから、皆さんにお話して集めましょう。その目標額位でしたら、私一人でも集められましょうし、他の委員の方々も尽力して目標以上恐らく集まるでしょうから、どうぞ安心して研究に励んで下さい」と言われた。貧乏書生の懐勘定しかできぬ私には正に驚きであり、大船に乗った気になり、及ばずながら私も大に集めようという自信とはずみを得た。その後一ヶ月餘にして、氏は独力で目標額を突破する賛助金を勧誘された。他の委員の方々の御尽力のおかげで本文庫の募金は目標額を遙か上廻る成功を収めた。此は塾を愛し學術を重んずる各位の御厚意のしからしめる所であることは言うまでもないが、かく導かれたのは一に氏の声望と御自身親らが頭を下げて勧誘されたからに外ならない。塩山さんの頼みだからと言って皆さんは出して下さったのである。此によつて斯道文庫賛助員会の軌道は敷かれ、現在に至るまで、引き続き文庫は氏の愛顧に負うことまことに絶大である。

文庫の研究事業は人件費事務費を除いては、塾の支出する經常予算の数倍を支出していた。それは外部の文部省や各種の財団からの研究補助金と賛助員会の金である。この外部からの補助金は賛助員会の金額を上廻ることも多つたが、それは応募方式で単年或は二年継続であるから、それをあてにしては長期の計画を立てるわけにゆかず、常に基礎となつたのは賛助員会の援助であつた。それを誘い水とし種として更に他に補助を仰いで自転車操業を続ける有様であつた。文庫の生命とする貴重稀観典籍はこの頃は市場に出ることも尠く、またその価格は高嶺の花となつたが、文庫創設期の卅年代末から四十年代前期はまだ市場に出廻ること多く、その価格も何とか工面し努力すれば購入し得

る範囲内にあったので、その購得に百方面策奔走し、マイクロフィルムの複写、斯道文庫論集の刊行と、予算に比し一見放胆な積極性を以てその基礎を充実せしめ、研究活動の伸展を計り得たのは、一に賛助員会の援助金が控えていたからである。この時にこの資金がなかったならば、文庫の研究活動は誕生早々にして実質上は夭折せざるを得なかったであろう。この事実はここに記録にとどめ、今後永く我が文庫員の記憶に刻みたいと思う。

私は文庫の賛助員会の用件で全く畑違いの実業界の多くの方々におめにかかる機会を得た。それはただ要件―おねだりかお礼―の簡単な暫時の応接にすぎないが、私にとっては教えられ反省させられることが極めて多い。就中最もおめにかかる機会の多かった氏には益々敬愛の念を覚えた。功成り名遂げられた氏は、私共にとっては洗練された枯淡の老紳士で、後輩の志を伸ばし達せしめようといつも温く手を伸して下さる長者の風格が漂っておられた。氏に初めてかかった後には清々しさを覚えたものである。氏は取引の関係上高価な美術書や豪華本の購入も多かったよう
で、文庫にむきそうな本は文庫に寄贈して下さった。帰りがけに文庫へさし上げる本がたまっていますからと言われ
て、大型の重い本なので、社の方に手伝って頂いて車についで帰庫したことがよくあった。氏は文庫にとってはよく
お小遣をはずんで下さるよきおじいさんであられた。

最後におめにかかったのは、恐らく会長を辞される前頃であったであろう。長年の習慣で八時には入社され嬰鏢として長軀瘦身の端正な身だしなみには些かの崩れも見られなかったが、挙措には些少衰容の徴は蔽うべくもなく、ただいよいよ天寿を永く享けられんことを祈っていた。相談役に退かれた後、いずれお訪ねして文庫の近況を申し上げ、且つは用件を離れた閑談の機に恵まれたいと期し念じながら、怠慢のあげく終に訃報に接し、ここにまた悔を残すに至った。

教育研究や文化事業は、釈氏が自ら直接生産を行わず、喜捨を乞う托鉢の業の如きものである。托鉢によって身を

立てる聖職に携わる者は感恩の情が求道の動力となり、自らを律すること厳でなければならぬ。省るに我が斯道文庫ほど多くの方々の喜捨によってなっている所は少いと考える。私共が毎日手にするこの本、これ多く寄贈の図書である。しかしながら残念なことはその期待に応える如き鬱然たる一大業績を文庫が既に世に送ったとは未だ断言できぬことである。ただその公刊の論考に些か見るべきものありとすれば、それは大方の文庫へ寄せられた御芳志に一日も早くそいたいというのがその源動力となっているというのが文庫員一同に漲る微衷であると信ずる。

阿部隆一謹識